B組でヒーローアカデミア！

ジャンボどら焼き

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

雄英高校１年Ｂ組に入った一人の少年のお話。

目次

プロローグ：入試試験 ―――― 1
第2話：『個性把握テスト』 ―――― 15

プロローグ：入試試験

名前も知らない同い年の少年少女たちが共にバスに揺られ走ること数分。訪れたのは巨大なコンクリートの壁に囲まれた、もはや街と呼べるほどの大きさのグラウンド。

一人また一人とバスの乗降口から降り、グラウンドへと入るための入口へと集合する少年少女。人により差はあるものの、一様にして緊張の表情を浮かべている。

それもそのはず。これから行われるのはとある高校の入試試験、しかも合否を左右するといっても過言ではないほどに大事な実技試験なのだから。

試験開始までの時間、準備運動をするものや集中力を高めたりするものと、それぞれがベストなコンディションで試験に臨もうとしている中。

「ふー……やっぱり緊張するなぁ」

スポーツウェアに身を包み、緊張を和らげるために小さく深呼吸するサイドテールの女子の名前は拳藤（けんどう）一佳（いっか）。

「大丈夫大丈夫、この日のためにちゃんと準備してきたんだから」

自分へ言い聞かせるように呟きながら、胸のあたりをトントンと優しく叩く。

受験をするにあたり事前から準備はしてきたが、やはり本番を目の前にするとわずか

にだが、心の端っこに不安が顔をのぞかせてくる。
少しでも緊張を和らげようと、拳藤が周りの受験者たちに目を向けたその時。ひらりと、風に乗せられた一枚の赤い紙が彼女の目の前へと落ちる。
何だろう、と拳藤はその紙を拾い上げ確認すると
「……『斬』？」
紙に書かれていたのはその一文字のみだけが書かれており、再び拳藤が首を傾げ紙に視線を落としていると。
「あーそこのサイドテール女子」
「ん？」
自身の髪型ということもあり、ついその声に反応し顔を上げる拳藤。するとそこにいたのは自身と同じくスポーツウェアに身を包んだ少年の姿が。
男子にしては珍しいポニーテールの髪型をした彼は、申し訳なさそうにしながら拳藤へと近づき
「拾ってくれてありがとさん。それ俺のなんだ」
「それって、この紙のこと？」
「そう、その紙のこと」
拳藤から紙を受け取った少年は、腰につけたポーチへとそれをしまう。ちらりと見え

たその中には、先ほどの紙と同じものが何枚も入っており、拳藤は不思議そうにそれを見つめる。

そしてポーチへと紙をしまい終えた少年は「よしっ」と満足そうに笑みを浮かべ

「改めて、拾ってくれてありがとう。俺は文貫（ふみぬき）　字現（じげん）、お前さんは？」

「私は拳藤　一佳。別にたまたま目の前に来ただけだから、礼なんていいよ」

快活に笑う文貫につられ、自身もまた笑みを浮かべる拳藤。

『はいスタートー!!?』

すると唐突にそんな合図が聞こえ、二人はもちろんのこと、周りの受験生の誰もが声の聞こえてきた方角へと顔を向ける。

『実戦じゃカウントダウンなんざねえんだよ！　際はとっくに投げられてんぞ!?』

なんとも雑なスタートコールだと、受験生たちは心の中で思うがすでに試験は始まっている。

彼らは一斉に会場へと向かって駆け出し

「んじゃ拳藤、互いに悔いないよう頑張りましょうや」

「だね！」

文貫と拳藤もまた、彼らの後に続きグラウンドへと足を運ぶのだった。

「デヤァ！」

ビルのそびえ立つグラウンドの一角。拳藤の〝個性〟により巨大化され、力任せに振り下ろされた平手がロボットを押しつぶす。

「ふぅ……これで５０Ｐ！」

ロボットが動かなくなるのを確認し、腕で汗を拭う拳藤。試験が始まりかれこれ６分が経過しようという頃、会場を動き回ったおかげでだいぶ疲労が溜まってきた。

今回の試験の内容は『どれだけ目標の撃破できるか』というもの。１～３Ｐが振り分けられた三種のロボットを倒し、より多くのポイントを稼ぐのが目的。

しかしロボットの数には恐らく限りがあるはずと拳藤は予想する。なのでこの試験で求められるのは単純な戦闘力だけではなく、機動力や情報力などの力も合格の要（かなめ）となる。

（運良くロボットが固まってたから良かったけど、さすがにここからは今までのように上手くはいかないはず）

情報力や機動力が別段ずば抜けているわけではない拳藤。ここから試験終了までの間、どうやってポイントを稼ぐのかを考えつつ会場を走り回る。

幸い、と言えば良いのか。他の受験生の口にするポイントが自身よりも高くはない。新たなロボットを探すため足を進める拳藤だが、闇雲に動いて見つかるものでもなく。どうしようかと頭を悩ませていると。

「おーい、拳藤ぉー！」

どこからか自身の名前を呼ぶ声が聞こえてくる。この会場でその名前を知っているのはただ一人だけ。

拳藤は周りを見渡しその姿を探すが、しかし如何してか姿が見当たらない。すると突如拳藤を影が覆い、ふと見上げると

「文貫！」

「よっ、さっきぶり」

そこには宙へ浮かび、自分へ試験開始前と同じ笑顔を向ける文貫の姿が。

自分に気づいたことで地面へと降り立ち、拳藤へと近づく文貫。

「結構急いでるんだけど、何か用？」

「いやね、ちょいと見かけたから声かけただけ、ってちょちょちょ待った待った！」

この場を立ち去ろうとする拳藤を慌てて引き止める文貫。だが時間に限りがある以上、この場で無駄に時間を消費するわけにはいかない。

そう目で訴えてくる拳藤に、文貫は相も変わらず笑みを浮かべ

「んな闇雲に走っても無駄に体力消費するだけでしょうが。一度気持ちを落ち着けなさいな」
「そんなことして言っても、私の〝個性〟じゃどこに何がいるのかわからないし。それに悠長なこと言ってる場合でも」
「別に〝個性〟が全てじゃないでしょ。ほら、よく耳を澄ませてみ」
　文貫にそう言われ耳をすませる拳藤。するとかすかにだが、遠くから爆音に似た音が聞こえて来る。
「爆音が聞こえるってことは、そこにターゲットが集中してると言ってるようなもの。あとはそこに向かえば、勝手にターゲット（あっち）から出向いてくれるでしょうよ」
「そっか、音でターゲットを引き寄せて」
「そういうこと」
　目標を捕捉し近寄るタイプのターゲット。つまり派手な戦闘が行われている場所に自然と集まるのだ。
　あれほどの爆音がなっているのだから、ターゲットの多くはあそこに向かっているはず。
「どこの誰だかはわからないが、あれだけ派手な戦闘ができるなんて相当な〝個性〟持ちでしょうね」

「というかゆっくりしてないで、わかったんなら早く行かないと！」
「おお、そうだったそうだった。ささっ、レッツゴー」

　爆音を目指して走ること1分と少し。目的地に到着した二人の前には、多数のロボットに囲まれながら戦闘を繰り広げる逆立ったベージュ髪の少年が。
　彼は迫るロボットを上手くかわしながら、手のひらから生み出す爆発で一体、または数体まとめて吹き飛ばす。
「なるほど、爆発の〝個性〟ねぇ。こりゃ強いし派手なわけだ」
「んなこと言ってないで、私たちもいくよ！」
「おうおう、こっちもやる気十分なことで」
　爆破の少年のおかげで集まったターゲットに向かって走り出す拳藤。近づいてくる彼女を捕捉したロボットは迎撃するが
『目標発見！　ブッ殺ス！』
「できるもんならやってみな！」
　突き出された拳が突如巨大化。予想外の出来事にロボットはなすすべなく、一矢報いることもできずに戦闘不能に陥る。

『大拳』。それが拳藤の持つ〝個性〟の名前だ。能力は名前の通り『拳の巨大化』。シンプルだが強力かつ応用の効く〝個性〟だ！

〝個性〟を用い次から次へとターゲットを破壊する拳藤。だが試験も終盤で走り回り体力的にも限界が近づいており、わずかにだが集中力が途切れてしまう。

『隙ダラケ！　マヌケメ！』

「しまっ――」

背後から迫っていたロボットに気づいた時にはすでに遅く、迎撃しようにも間に合わないところまで来ていた。

鉄の拳が振り下ろされ、拳藤を背中を殴りつける直前

「おいおい、女の子相手にそりゃいかんでしょう」

突如振り下ろされたロボットの腕が三等分に切断。音を立てて地面へと落ちると砂埃を巻き上げる。次いで本体が斜めに切り裂かれ、上部分が滑り落ち、ロボットはその機能を停止させる。

動かなくなったロボットの後ろからは、いつの間に用意したのか、棍棒のような武器を持った文貫がひょっこりと姿を現した。

「大丈夫だったかい？」

「うん、助かったよ……ありがとう」

「なに、紙拾ってくれたお礼をしたまでさ。それよりも、まだいけるかい？」
「うん、大丈夫」
もう大丈夫。油断はしない、と拳藤は拳を握りしめて気合いを入れ直す。
そんな彼女に文貫は笑みを向け、目の前に並ぶ幾つものロボットを見据える。
「そんじゃヒーローらしく、この場は共闘といきましょうや」
「オッケー、背中は任せたよ！」
これまでよりも一際強い爆音を合図に、二人はその群れの中へと身を投じた。
「まずは俺が気を引いてきましょうかい」
拳藤よりも早くロボたちへ肉薄した文貫は、あらかじめポーチから取り出していた灰色の紙を手にし
「この紙にはタネも仕掛けもございません」
『ブブ、ブッ殺ス！』
『目標排除、ハイジョ！』
標的を文貫に絞ったロボット数体が襲いかかる。
振り下ろされる鉄の拳を前に、されど文貫は慌てることなく紙を地面へ叩きつけると。
「まずは『壁』」

突如、文貫とロボットたちを隔てるように、コンクリートの壁が天へと向かって伸びる。ロボットの拳は現れた壁によって防がれ、甲高い音を鳴らしながら形を歪ませる。

対人用に威力は抑えてあるらしく、壁にはわずかにヒビが入っただけで収まり

「お次は『爆破』」

壁に赤い紙を貼り付け後退。すると紙が発光し、あのベージュの少年ほどではないが爆発を起こすと壁を破壊。衝撃で砕け散り吹き飛んだコンクリートが弾丸となり、近づいていたロボットたちへと襲いかかる。

正面にいたロボットはコンクリートの弾丸で破壊され、周りのロボットたちも衝撃で体勢を崩す。さらには煙での視界不良のおまけ付きだ。

「もらったぁ！」

次いで煙の中から現れた拳藤は、両拳を巨大化させ身近なロボットをまとめて叩き潰す。その後は近づいてくるロボットへ両手を振り回し牽制、一定距離から近づけさせない。

拳藤が時間を稼いだ間に次なる準備を整えた文貫が、片方のロボットの群れへと突撃する。

「見ての通り、ごくごく普通の棍棒ですがあら不思議」

またも灰色の紙を手にした文貫は、それを地面ではなく棍棒へと貼り付ける。そして

ロボットたちへ向けて棍棒を振り抜くと、ロボットたちの体はバラバラにされ。しかもその断面はまるで斬られたかのように綺麗なものであった。

崩れ落ちるロボットたち。しかしその向こう側にまだ2体のロボットが残っており

「ありゃ、残ってたか。なら――」

文貫は棍棒を左手に持ち直し、空いた右手の人差し指を立てる。すると指先がかすかな光を灯し、文貫は指先を棍棒へと向け素早く指を動かす。

その動きに合わせ宙には光と同じ色の線が走り、ものの3秒とかからず『伸』の文字が完成する。最後に文字を棍棒めがけて指で押すと、文字は縮小しながら棍棒に吸い込まれていく。

準備を整えた文貫は棍棒を居合するかのように構え、

「伸びろ如意棒ってね!」

横薙ぎに振り抜くと、なんと棍棒がその長さを何倍に増し、数メートル離れたロボットたちを横一文字に切り裂く。

ロボットたちを倒し終えた棍棒は元の長さへと戻り、文貫は背後で戦っているであろう拳藤へと顔を向ける。

「お、そっちも終わった?」

ちょうどのタイミングでロボットを倒し終えた拳藤が笑みを浮かべ振り返る。

「途中チラチラって見てたけど、凄い〝個性〟だね。なんていう〝個性〟なの？」
「共闘したよしみだし教えるのはいいが、そこまで大層なもんじゃないですぜ？」
期待に胸を膨らませる拳藤を前に、頬をかきながら自身の〝個性〟を説明する文貫。『文字力（もぢから）』。自身の指から出る光で書いた文字が持つ意味を具現化させる〝個性〟。直接書き込むことも、空中に書くこともできるぞ！　紙に書き置きしてストックすることも可能だ！
「文字を具現化か。やっぱり凄い〝個性〟じゃん」
「そう言ってくれると嬉しいねぇ。俺からしたらお前さんの〝個性〟もシンプルで強いと思うけど」
そんな風に二人が会話をしていると、ズズンッ、という地鳴りが話を遮る。
何事かと二人が音のする方へ顔を向けると、視界を埋め尽くすほど並ぶ高層ビルの一端が崩壊。崩れ落ちるビルの向こう側から巨大な影が姿を見せる。
――０Ｐのお邪魔虫！　所狭しと大暴れしているギミックよ！
試験の内容を説明したヒーローの言葉が頭をよぎる。お邪魔虫とは聞いていたが、だがこんな大きさだとは聞いていない。
「あれはー……ちょいとデカすぎやしませんかい？」
「てか、あんなのどうやって対処しろっていうのさ」

「んー、とりあえずポイントにはならないんで、まぁ逃げる一択でしょう」
他の受験者たちも文貫の考えと同じようで、巨大ロボットから逃げるように走り去っていく。
「俺たちもさっさとトンズラこきましょうや。あんなもん、相手にするだけ無駄ってやつさね」
「それはそうだけど……ってあれ！」
敵を相手にして逃げるという選択肢を取ることを渋る拳藤。
すると彼女は何かを見つけたようで、文貫がその視線の先を追うと、そこには怪我をしてうまく歩けずにいる受験者の姿が。
あの歩行速度ではすぐにロボットに追いつかれる。そうなれば崩壊したビルの瓦礫に巻き添えになる可能性も高い。
「ちょっと行ってくる！」
「行ってくるって……あらら行っちゃった」
すぐさま受験者の元へ走り出した拳藤。傷ついた者のために行動できる姿勢は立派だが、如何せん今は状況が悪い。
負傷者を助けることはできるが、人を抱えたまま逃げ切るのは難しいだろう。
見ていて危なっかしいとは思うが

「まぁ俺としてはそういう人間、嫌いじゃないかな」
笑顔を浮かべながら、文貫は近くに転がっているロボットの残骸へと近づく。拳藤のように危険に身をさらすつもりはないが、助力程度ならば請け負うつもりらしい。
「俺もちょいとだけ、本気出しましょうかね」
そう言い、骸と化したロボットへ指を伸ばし〝個性〟を発動させる。
刻むは上から『徹』と『甲』そして『弾』の三文字。
「文字は綴れば意味を持つ。より具体的に、より強く」
文字を繋げ、さらに強い力を引き出す。
その名を
「文字力『綴』――三連」
『徹甲弾』。その文字を刻まれたロボットの残骸は、堅牢な鎧を貫くための銃弾と化し
「よし、飛んでけ！」
地面を離れ巨大ロボめがけて一直線に向かい、胸部へとぶつかり甲高い音を立てる。その衝撃で巨大ロボットはたたらを踏み後退。
その隙をついて負傷者を抱えた拳藤が逃げ切るのを見て、文貫もまた他の受験者同様にロボットへ背を向けるのだった。

第２話：『個性把握テスト』

「んー、久しぶりに来たけど相変わらずの広さだこと。さすがは超名門ってところかね」

春。真新しい制服に身を包み、校門の前でこれから通う学び舎を見ながら呟くのは、ポニーテールが印象的な少年　文貫。

先日受けた入試は無事合格し、晴れてこのヒーロー科最高峰と名高い雄英高校へと入学することができた。

倍率３００倍と言われる雄英高校ヒーロー科への進学。合格通知が届いた時の両親の驚きようと言ったら、今でもクスリと笑ってしまうほどに面白いものだった。

なんてことを考えながら、高校の敷地を歩いていると

「うん？　あの後ろ姿は確か……」

自身の少し前を歩く女生徒。歩くたびに揺れるサイドテールを見て、もしや、と思った文貫は歩く速度を速める。

そして距離が1メートルほどにまで近づいたくらいで、その仮定は確信へと変わる。

「おーい、そこのサイドテール女子」

「ん？　私……って、お前は」

いつぞやの時と同じ呼び方をすると、予想どおりこちらへ振り返る女生徒。そんな女生徒へ文貫は笑みを浮かべ小さく手を挙げる。

「よう、お久しぶり拳藤」

「お前、文貫!?」

「あら覚えててくれたんだ。ありがたいねぇ」

女生徒、拳藤　一佳は文貫を見て驚き目を見開かせる。

「やっぱり合格してたんだな」

「ははっ、運良く合格できましたよ。そっちも、無事に合格できてなによりだ」

実技試験で互いに共闘しただけあって、この場でこうして顔を合わせられたのは非常に嬉しい。これで仮にどちらかが落ちていたら……そこで文貫は考えるのをやめた。

「そういえばクラスはどこ？　私はB組なんだ」

「おお奇遇だねぇ、俺もB組なんですよこれが。いやぁ、知り合いがいるってのは気が楽でいい」

「知り合いって、まだ会って間もないだろ」

「いやいや、顔と名前を知ってれば十分ってもんだし、それに一緒に試験を乗り越えた仲でしょう」

確かに共に試験を乗り越えはしたが……まぁ彼が知り合いというのだったらそういうことにしてこう。別にそれで困るわけでもないし。

そんな会話をしつつ、教室へと向かって足を進める二人。

そして数分後、二人は辿り着いた『1―B』と書かれた扉の前でしばし呆然と立ち尽

くす。

「……扉でかくないか？」

「確かにこれは、デカすぎる……かな？」

拳藤の言葉に苦笑いを浮かべつつ同意する文貫。ざっと４メートル近くはあるだろうか、見上げるほどの高さの扉に言葉を失ってしまう。

おそらくは様々な〝個性〟に対応するためのバリアフリーのようなものなのだろうが、にしてもデカすぎではないだろうか。

だがいつまでも扉に目を奪われている場合ではない。文貫は扉に手をかけスライド、教室の中へと足を踏み入れる。

「どーもー」

挨拶しながら教室を見渡す。

中には茨いばらのような髪をした生徒やメガネをかけた獣のような生徒、さらには全

身真っ黒な生徒など多種多様な見た目をしたクラスメートの姿が。

するとそんな生徒の中から一人、灰色の髪をした強面の男子生徒が歩み寄ってくる。

「おう、お前らもB組か！　俺は鉄哲（てつてつ）　徹鐵（てつてつ）ってんだ、よろしくな！」

「こりゃまた、元気のいい自己紹介をどうも。俺は文貫　字現、こっちこそよろしく頼むよ」

「私は拳藤　一佳。よろしくな、鉄哲」

「席は出席番号順になってるらしいからよ！　一応黒板にも書いてるからそれ見てくれや！」

そう言い二人の元から離れる鉄哲。初対面だというのにこの気配りの良さ。強面と声の大きさから勘違いされそうだが、彼もまたヒーローを目指す者の一人だということがわかる。

文貫が黒板に視線を向けると、鉄哲の言う通り席の割り振りが書いてあった。二人はそれを参考に文貫と拳藤は自身の席へと移動する。

三列目の一番後ろ。そこが文貫が与えられた席だった。
机の上にカバンを置き、静かに席に着く文貫。そして改めて教室の中を見渡すと、やはり個性的な面々が集っていた。
ぼーっと、文貫が視線を右へ左へ動かしていると

「ばぁ！」

そんな声とともに突如、文貫の視界に女性の顔が映し出される。突然のことに文貫は目を丸くさせ、その女生徒の顔をまじまじと見つめる。
予想とは違う反応を見せる文貫に、女生徒は「ん？」と首を傾げ

「あれ、びっくりしなかった？」
「びっくりしたはしたんだが……ちょいと唐突すぎやしませんかい？」
「いやーなんだか眠そうな感じがしたからさ。ちょっと目を覚まさせようと思ってね」
「その心遣いは感謝するけれど、そういうのはもうちょい仲の深い人とやるもんだと思うがね」

黒みがかった緑色の長髪が特徴的な女生徒に、文貫は苦笑いしつつ自身の右手を差し出す。

「俺は文貫　字現。おたくの名前は？」
「私は取蔭（とかげ）　切奈（せつな）、よろしくね」

取蔭と名乗る少女と握手を交わし自己紹介を終えたところで、教室の扉が開き一人の男性が入室してくる。

赤と白が特徴的なヒーローコスチュームの下には、一目で鍛え上げられたとわかる筋肉質な肉体が。下顎から伸びた牙と左頬の十字傷が印象的な彼はプロヒーローの『ブラドキング』。

プロのヒーローの入室に教室内は静まり返り、教壇に立ったブラドキングは席に着く生徒たちを見渡し静かに口を開く。

「全員揃っているな。俺は今日からB組の担任をする『ブラドキング』だ」
「うっそ、ブラドキングって……」
「マジのヒーローじゃん。やっぱり雄英すげー」

本物のプロヒーローの登場にざわつく教室内。さすがはヒーロー科高校の最高峰と言われるだけはある。プロのヒーローが教師とは、なんとも贅沢すぎる環境だ。

「これから簡単に今日のスケジュールを説明する。まずは入学式だが――」

テキパキと、手際よく今日のスケジュールを説明するブラド。

彼の話を一通りまとめると、今日は初日ということもあり入学式と簡単なガイダンス程度で終了。本格的な授業は明日から行うという、実に簡潔なものだった。

さすがに雄英といえど、初日から色々とぶっこんで来るわけではないらしい。

「とまぁ、これが通常生徒のスケジュールだ」

「通常の生徒、と言うことは俺たちは違うんですか？」

何か含みをもたせたようなブラドの言葉に、骸骨に似た顔の男子生徒が挙手をし質問する。

その質問にブラドは「ああ」と返し

「お前たちには『個性把握テスト』を行ってもらう」
「個性把握、ですか？」
「ああ。今の自身の〝個性〟の段階を知るためのテストのことだ。それを知る知らないでは今後の改善に大きく影響してくる」

ヒーローにとって〝個性〟をどう生かすのかが重要なポイントとなってくる。長所と短所を知り、得意を伸ばして不得意を改善する。そのためには今の自分がどの程度〝個性〟を操れるのかを知る必要がある、とブラドは語る。

「だがそれはお前たちが望むのならば、という話だ。最初も言ったが今日は初日、明日に備えて心身ともに落ち着けたいと思うものも少なくないだろう。俺も鬼ではないからな、無理なら無理と言っても構わないぞ」

それでどうする――そう目で語るブラドにいち早く答えたのは

「俺はやりますよ先生！」

文貫に席を教えてくれた男子生徒、鉄哲だった。彼は勢いよく立ち上がり力強く拳を握り締めると、クラスメート達へ視線を向け

「お前らも！　ヒーローを目指すってんなら、初日だからって甘えないでやろうぜ、テスト！」

「……まぁそうだな。やって損ってわけじゃないし」

「いっちょやるか、個性把握テスト」

そう、力強く叫ぶ様はまさに熱血漢。背景に炎を思わせるほどに力説する鉄哲に、クラスメート達も賛同。

そんな生徒達の様子を小さく笑みを浮かべ眺めていたブラドは

「結論は出たな。では今日の日程がすべて終わった後、体操服に着替えてグラウンドに集合。望み通り個性把握テストを行う！」

「「はい！」」

そうしてＢ組の面々は放課後の『個性把握テスト』に向け、モチベーションを高めつつ入学式へと向かうのであった。

入学式、そしてガイダンスを終えた文貫達１年Ｂ組の生徒達は、体操服へと着替えてグラウンドへ集合していた。
試験の行われたビル群のようなグラウンドではなく、今回はれっきとした運動場での活動だ。

「集まったな。それでは、これから個性把握テストを行う」

先にグラウンドで待機していたブラドは、集合が完了した生徒達に視線を向け個性把握テストについての説明を開始する。

「試験内容はいたって単純。〝個性〟を使用した体力テスト、それだけだ」

ソフトボール投げ、立ち幅跳び、５０メートル走等、自身の身体能力を図る体力テス

ト。中学までは〝個性〟を使用することなく行われてきたが、今回行われるのは〝個性〟を使用したもの。

「それぞれの〝個性〟がどんな分野に秀でているのかを限界と一緒に知れるわけですね」

「ああ、そういうことだ。各々、自身の〝個性を用いて励んでくれ」

ブラドの説明に骸骨顔の男子生徒が納得したように、このテストの目的を考察する。

始業式前にブラドが口にした『個性の段階を知る』というのは、各自の〝個性〟の得意と限界を知るということ。持久力や筋力、瞬発力などを図る体力テストは〝個性〟を知るにはうってつけのテストといえるだろう。

「さぁ、テストを始めるぞ！」

そうして始まった個性把握テスト。

第一種目は５０メートル走。敏捷性や走力を測るテストだ。

ここで輝いたのは下顎から獣のような牙を生やした男子生徒だった。彼はスタートの合図とともに体を巨大化させ、両手足で地面を力強く踏み抜き

「素早さというのなら、私は少々自信があるのですなァァァッ‼?」

まるでテンションが振り切ったかのように高らかに叫びながら、獣のごとき速度でレーンを駆ける。

結果は『4秒1』という驚異的なもので、クラスメートたちは彼の結果に「おぉ!」と声を漏らす。

「ははっ、さすがに身体強化系が頭一つ抜け出るか」

その結果を見ていた文貫はそう呟くと、自身の出番に備えて準備運動を始める。

そんな文貫に声をかけたのは、第一種目を終えた鉄哲だった。

「おぅ文貫! もうすぐお前の出番だな! 頑張れよ!」

「ありがとさん。そういうお前さんはどうだった?」

「まぁまぁだった！　もっとも、俺の〝個性〟は速さには向いてねぇからな！」

そう言い親指を立てる鉄哲。相変わらず前向きな鉄哲に文貫は小さく手を振りスタート地点へと向かう。

するとそこには、すでに準備を整えていた取蔭が軽くストレッチをしており

「お、来た来た。さっ、やろか」

軽い口調で言うと取蔭は小さく口元に笑みを浮かべる。

「ははっ、お手柔らかに頼みますよ」

文貫はスタート地点へ立つと、自身の〝個性〟を発動させる。右手の人差し指に灯る光は線となり、文字を形作っていく。

瞬く間に文貫の前には『速』の一文字が完成し

「文字力『纏（まとい）』」

そう呟くと文字は文貫の体へと吸い込まれていき。隣ではその一部始終を眺めていた取蔭が不思議そうな瞳を向け尋ねる。

「へー、それがあんたの〝個性〟なんだ」

「まぁそういうこと。ああでも過度な期待は厳禁ということで」

そう話をしている間に合図が鳴り、両者は同時にスタートする。

が、二人が並んでいられたのはほんの一瞬、たった一歩の間だけだった。

風を切り、およそ常人では出せない速度でもう一人の走者を置いていく文貫。〝個性〟により増幅された走力は瞬く間に取蔭との距離を離していく。

その速度は結ばれた髪が一直線に伸びたまま靡くほどで、周りの生徒たちはそんな彼の姿に「おぉっ」と感嘆の声を漏らしている。

「おぉ、速ぇなあいつ」

「身体強化系の〝個性〟か。機動力はなかなか良さそうだな」

各々が感想を口にする間に文貫は完走。
ふう、と息を吐きタイムを計測していたロボットへと視線を向ける。

『ピピッ……5秒』
「5秒か……まぁ上出来ってところかね」

自身のタイムに喜ぶでも落ち込むでもなく、納得したような表情を浮かべる文貫。
その直後、もう一体のロボットが計測を終えた音を鳴らし、文貫が視線を向ける。だがそこにはいるはずの取蔭の姿はなく、文貫は不思議そうに視線をその場にとどめていると、不意に肩を誰かに叩かれる。
振り返ると、そこには宙に浮いている人間の指が。

「お……おぉおおおっ!?」

まるでホラー映画のような光景に、文貫はたまらず叫ぶ。
ここだけの話、文貫は幽霊だとかそういう類のものが苦手である。それはもう、『大』

がつくほど。

「あっははは！　いやー、あんた良い反応するね！」
「と、取陰！　これ、お前さんのっ」
「そっ、私の〝個性〟。いやー、気に入ってくれたようで何より何より」

笑いながら歩いてくる取陰。
彼女からしてみれば、軽い〝個性〟の紹介のつもりなのだろうが、如何せんやり方が悪趣味すぎる。

文貫の非難の視線を受けながらも、取陰はからからと笑みを絶やさない。

「……はぁ～。とりあえず、そういうのはやめてくんないですかね？　こちとら、心臓が口から飛び出そうだったんですわ」
「んふふ～、了～解っ♪」

ああ、これは絶対にわかってない奴だ。

嗜虐的な傾向のある取陰に、最重要警戒人物の称号をつけた文貫は、次なる種目へと向かうのだった。